

●二つのビジョン

情報民主主義論（ユートピア論）

平等な発信能力の保障、コミュニケーションに対する物理的・時間的な制約の弱体化。

→意思決定への直接的参加が可能に。＝直接民主制の現実化可能性

e.g. マイケル・ハウベン&ロンダ・ハウベン『ネティズン』

ここから、コミュニケーションにおいて機会均等が生まれる可能性が展望されることになる。対面でのコミュニケーションでは対話者の社会的な地位や役割が会話内容に大きく影響するものである。地位に上下があれば知識のやりとりにもその関係が反映された文章が用いられることになる。しかしコンピュータ・コミュニケーションにおいては、そのような社会的地位を脱ぎ捨てた会話が可能になる。また、身体的なハンディキャップが、技術的にだけでなく、心理的にも解消される可能性が生まれる。パソコン通信のもつこうした性質が、情報民主主義を期待させるのである。(松原 364)

デジタルデバイド論（問題提起）

1999.7 アメリカ商務省報告書「ネットワークからこぼれ落ちる——デジタルデバイドを定義する」

Falling through the Net: Defining the Digital Divide

民族集団、年収、学歴 etc.によってコンピュータ保有率・ネット接続率に格差

木村忠正・NTT データ開発本部 RISS 協働調査

高学歴者ほどインターネット利用が普及、利用意向も高まっている。

解決策 情報化の傾向自体を止めようとする

情報リテラシーの普及対策を考える

問題点 どちらがタマゴでニワトリか？(木村 40)

そもそも競争は公正だったのか？

社会に参加するために一定の能力を要求することに問題はないのでは？

放置すれば解決する問題ではないのか？

デジタルデバイド論の二枚舌(木村 53)

- ① 世帯(個人)のアクセス手段(非)保有が一定の社会階層における(非)保有と密接に結びついているという個人レベルでの情報行動、消費行動の問題
- ② 情報ネットワークの利活用が競争優位性をもたらす、経済的格差、社会的格差に結びつくという企業・組織・社会レベルでの産業経済活動の問題

電脳世界論（ディストピア論）

生活世界(日常)・電脳世界(非日常)という二分法

個人の自己同一性の解体 → 現代社会の崩壊

「自分にとって必然的・宿命的な所属の領域」の形成不全(大澤)

個人の空虚が VR によって埋められる危険性 (西垣)

「聖なるヴァーチャル・リアリティ」

大澤が個人の内面のレベルにおいて指摘した、自己同一性の分解は、権力のレベルにおいては『必然的・宿命的な所属の領域』における権力の正統性を分解させてしまう。つねに別な領域へと移動してしまうことを当然ととらえるばらばらな個人の集合には、相互のコミュニケーションのなかから公共的に統合された意思を形成していく公共圏が成立せず、権力の民主的な正統性を形成することはできない。(……)領域的な単位から、所与のものとしての不可避性が徐々に失われていく『情報革命』時代においては、そのような確立された手続による正統性は限りなく相対化されてしまう。しかしそこに公共圏が成立しないとなれば、安定的に受け入れられる正統な権力は存立しえなくなってしまう。(廣瀬 154)

●技術決定論の検討

電脳世界論とデジタルデバイド論の共通点

ネットワークを単一の・フラットな世界として見ようとしていること。
それは同時に、生活世界を単純な形で階層化された社会と看做す視点と通底している。

問題

人格は常に一つでなくてはならないのか
現実／ネットで統合されたものでなければならないか
現実の人格が本体であり、ネットのものが仮想であるという想定は絶対のものか

技術決定論への疑問

「どのような技術がどう使われ・どう発展していくのか——そこには社会の側の要因が大きな役割をはたしている。その意味で、『情報技術が社会のしくみを変える』とはいえない。むしろ、社会のしくみの方が技術のあり方を決めていっているのではないか。」(佐藤 20)

技術予測

技術実現予測と技術普及予測の差異

技術革新はたんによりゆたかにしてくれるだけではなく、従来の生活を破壊していくものなのだ。かつての電気洗濯機やテレビがまさにそうであったように、産業社会ではあらたな技術が登場するたびに、人間がそれにあわせて生活を変えていく。生活と社会のしくみのレベルのちがいに気づかなければ、それはそのまま『技術が社会や人間を変える』ように見えるだろう。／けれども、よく考えてみれば、これはむしろ正反対のことを示している。新しい技術は生活を変えるが、基本的な社会のしくみを変えることはない。産業資本主義の下では、日常生活は技術革新によって必然的に変えられてしまう。そういう形で変わってしまうこと自体が、産業資本主義という社会のしくみのなせる業なのだ。(佐藤 187)

●原(プロト)=近代の再生

ヴォランティアのコミュニティとしてのインターネット

古典的啓蒙主義との相似

全員の自発的参加、学習→習得の前提、知識＝価値。個人の自己責任原則。

自発的結社 voluntary association による最初の近代社会＝アメリカ

複数性(plurality)(……)つまり、複数の州＝会社(……)が並立的に存在し、個人がその間を移動できるようになっていた。(佐藤 223)

インターネットのコミュニティはヴォランティアの「協会」をそのまま「社会」にしようとした。また、そのなかで企業化が望ましい部分はどんどん「会社」化されていく。そうしたあり方自体が、実は、アメリカ社会の基本原理をより純粋な形で実現しようとしたものなのである。インターネットのコミュニティは、良くも悪くもきわめてアメリカ的な存在なのだ。／したがって、このコミュニティの姿に二一世紀の未来社会を見るとすれば、それはすなわち、近代のもっとも原型的な姿に未来の理想像を求めていることにほかならない。私たち日本人がインターネットのコミュニティに憧れているとしたら、私たちは近代的な(個人)の社会に憧れているのだ！(佐藤 226-7)

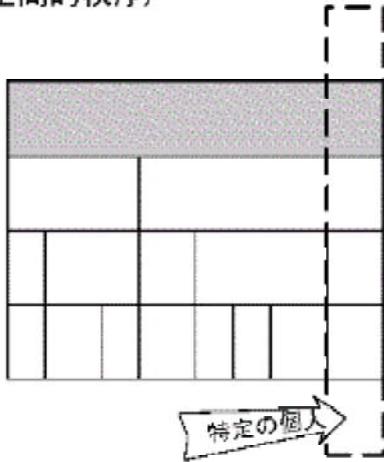
アレクシス・トクヴィル……自発的結社の氾濫

「すべての年齢、すべての地位、すべての精神のアメリカ人たちは、絶えず団結している。彼等はすべての成員たちが参加する商工業的団体をもっているばかりではない。なお、彼等は、他の無数の種類の団体をもっている。すなわち、宗教的、道徳的、重大な、無用な、ひどく一般的な、極めて特殊的な、巨大な、ひどく小さな、諸団体など。アメリカ人は祭を祝うために、神学校創設のために、宿屋を建造するために、教会を建てるために、書物を普及させるために、遠隔地に宣教師たちを派遣するために、団結する。彼等はこのようにして、病院をも刑務所をも学校をもつくる。そして最後に、真理を明らかにし、または偉大な実例にたよって、ある感情を發展させようとするときにも、彼等は団結する。」(トクヴィル邦訳 下 200-201)

問題主導的テーマ設定 → テーマ相互の関係は錯綜したものに

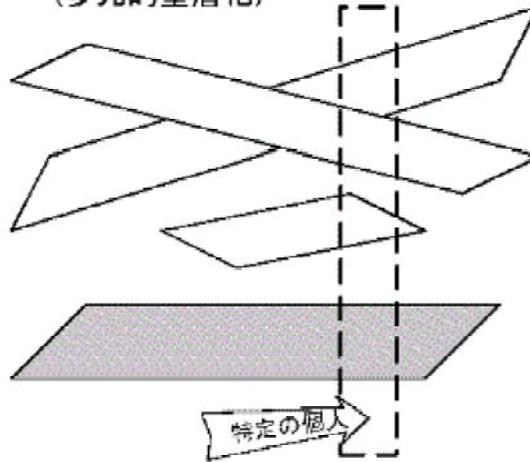
●多元的重層化

Cracking Model
(空間的秩序)



集団は必ずより大きな集団に内包される。
個人のアイデンティティは構造化された秩序のどこに位置しているかで示される。

3D Model
(多元的重層化)



集団はそれぞれ異なる原理で組織され、相互の関係は不分明。
個人のアイデンティティは分裂した各集団の中の位置の総体。
インテグリティを欠く危険と可能性。

空間的秩序

単一の組織原理によって分節され、下位の集団が必ず大規模な空間に包含される

一元的構造 = 法システムの基盤

問題解決の方法 = 問題の属するレベルを決定すること

国際法の次元において、権利能力 (Völkerrechtsfähigkeit) を持つのは国家のみである。

憲法の私人間効力

三菱樹脂事件(最大判 S48.12.12 民集 27 卷 11 号 1536 頁)

昭和女子大事件(最判 S49.7.19 民集 28 卷 5 号 790 頁)

分節原理自体の多元化

NPO・NGO (公的セクター)、多国籍企業 (私的セクター)

→ 互いの関係が不明確な複数の「地平」の共存

価値評価の基準(軸)自体の多元化

→ 共約不能な価値の対立、紛争解決手段をめぐる紛争

BIBLIOGRAPHY

松原隆一郎「コンピュータの社会的意義: その光と影」『さまよえる理想主義: 現代日本社会論』(四谷ラウンド 1996)

廣瀬克哉「「情報革命」と権力: 覇権化・アナキー化・民主化の相剋」井上達夫(編)『岩波 新・哲学講義 7 自由・権力・ユートピア』(岩波書店 1998)

大澤真幸『電子メディア論: 身体のメディア的変容』(新曜社 1995)

佐藤俊樹『ノイマンの夢・近代の欲望: 情報化社会を解体する』講談社選書メチエ 87 (講談社 1996)

マイケル・ハウベン&ロンダ・ハウベン『ネティズン: インターネット、ユースネットの歴史と社会的インパクト』(中央公論新社 1997)

Alexis de Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique* → 井伊玄太郎(訳)『アメリカの民主政治』(講談社 1987)

大屋雄裕「ネットワークと重層化するコミュニティ」『法哲学年報 2001 情報社会の秩序問題』(有斐閣 2002) pp. 76-91.

大屋雄裕「情報化社会における自由の命運」『思想』2004 年第 9 号(特集・リベラリズムの再定義), 岩波書店, 2004, pp. 212-230.